

共通論題 <「超大国」中国の光と影>

【趣旨説明】

中華人民共和国は昨年、建国 60 周年を迎えた。この間の中国の変化と発展はめざましいものがあり、私たちの中国に対する見方もこの間に大きく変化してきた。

1978 年の改革開放政策の開始時、中国の国内総生産(GDP)は日本の 2 割程度にすぎなかったが、その後中国は 30 年間にわたり年率 10%近い高成長を続け、その世界経済に占める地位は急速に上昇してきた。中国はすでに繊維、家電、鉄鋼など多くの産業において世界一の生産量を有し、輸出は世界一、外貨準備高も世界一となった。中国の GDP は 2007 年にはアメリカ、日本に次ぐ世界第 3 位になり、2010 年には日本を抜いて世界第 2 位となることが確実である。中国は、2030 年までに米国を抜いて世界一の GDP 大国となるとも予測されている。

このようなめざましい経済発展は、中国当局側の「永遠に発展途上国である」、「決して覇権を求めない」との主張にかかわらず、中国の国際政治的地位のいっそうの向上と軍事的強化を可能にしており、総合国力からみても中国はすでに世界的な大国としての地位を確立したとみることができよう。

従って、現在の中国について、1970 年代までのようなもっぱら社会主義国として、あるいは 1980 年代以降主流となったような発展途上国としてではなく、経済的にも政治的・軍事的にも、また社会的活力の上でもすさまじい勢いをもって発展するパワー（強大国）という見方が強まってきているのは、当然のことであろう。

冷戦終結後、アメリカが唯一の超大国、覇権国家となったといわれるが、中国がこれに挑戦し得るもう一つの超大国となる可能性があるという見解がメディアではしきりに議論されている。このような見方もまた現代中国のめざましい発展とそのグローバルな重要度の高まりを反映したものといえよう。

もちろん、中国の高度経済成長やそれにとまなう富強大国化の一方で、地域的・社会階層的な格差の拡大、硬直的な党＝国家体制と流動化する社会との矛盾、治安の悪化、農村での抗議行動や労使紛争の拡大、エネルギー・環境問題など多くの問題が存在していることもよく知られている。また、中国の大国外交や軍事力強化は、周辺諸国において強い懸念を呼び起こしている。

このような「危うい超大国」（スーザン・シャーク）である中国について、極端な中国脅威論やバラ色の中国発展論でもなく、その光と影の面をともに含めて冷静かつ学術的に認識すべく努め、相互の討論を行い、そして、その成果を学界だけでなく社会にも還元していくことが、私たち中国に関する研究や教育に従事しているものにとって急務ではないだろうか。このような問題関心に基づいて、本大会では『「超大国」中国の光と影』を共通論題として、経済、政治（外交）、歴史、思想の各分野から多面的に検討し、ともに議論し、認識を深めていきたいと考えている。

みなさまの積極的なご参加を得て、実り多い全国学術大会となることを祈念している。